

今月の軽井沢

細江久美子（撮影・文）



「プリンスグランドリゾート軽井沢」に設置されたイルミネーションツリーです。コロナ禍の最前線で闘う医療従事者に感謝の意を込めて、ブルーのライトが灯っています。コロナが終息し、みんなに笑顔が戻りますようにという願いを込めたスマイルツリーとなっています。



今月の詩

ゆあさとしお (選・文)

「歳末」

清岡卓行

年の暮れの昔ながらに賑やかな町が好きだ。
それも夜のはじめの頃のにび色の雑踏。

慌しい寒さの中をふと走りぬけるものは
オレンジへのせつない音楽と幻の小犬。

ほとんど動かないものは白っぽく冴えた月と
菓子屋の前で恋人を待つらしい影絵の青年。

それにしても古い年の悲しみの終着駅が
新しい年の櫓の始発駅だなんて。

地球の上のそのいじらしい暦の儀式は
四季の繰り返しを真似ているだけなのに。

その四季のノスタルジックな移ろいは
時間をぎこちなく色分けしているだけなのに。

おおしかし未来の嬰兒のためにしめ縄を買う
人間の知恵のそんな哀れなからくりが好きだ。

(清岡卓行詩集「固い芽」から)

歳末が好きだ。なぜと言われても理由は定かでないが。たぶん日常というケの日と正月というハレの日との境界に位置する「カオス」にこころが反応するのだろう。

「昔ながらに賑やかな町」「にび色の雑踏」、そんなところにふと紛れてみたくなる。屋台の物売りの声が聞こえる混沌とした夕暮れの町。たとえば、東京の佃島界隈の景色。「にび色」は藍がかかった薄墨色のことだ。

人間の創りだした「時間」「暦」という、いじらしい仮構。しかも、「古い悲しみの終着駅」が「新しい櫓(ソリ)の始発駅」になっているという重層的なフィクション。

「未来の嬰兒」とは、これから産み出される「時間」のことだが、そのために「しめ縄を買う」のだ。祈りをこめて。それを詩人は「哀れなからくり」と呼び、好ましく見つめている。

清岡の詩は、生きることの悲哀と希望が絶妙なバランスで配合され、洗練された伸びやかな喩によって表現されている。

[清岡卓行](#): 1922年大連生まれの詩人・小説家。詩集『四季のスケッチ』、小説『アカシアの大連』など。



あきる野の香りのするくあきる野っ子>を育てる「あきチャレ」
— 3つのきょういく（共育・協育・郷育）から

遠藤 隆一（あきる野サマーチャレンジ運営委員会 委員長
あきる野市社会教育委員の会議 議長）

この夏、僕らは旅に出たよ

山を越え、川を下り、夜中の2時に起きて向かった金比羅山から見たあきる野は、雲海のような靄に包まれていました。

4日間で80kmの旅だから、1人では……ちよっと出来そうもない旅だったので、地元の人たちと一緒に旅をすることにしました。

ほとんどの友だちは初対面だったけど、一緒に歩いて、一緒に生活をしているうちに、時に励まし、時に支え合えるようになりました。もしかすると、これが皆の言う仲間なのかもしれない。

仲間や学生スタッフから励まされ、ちよっと怖いこと、やったことないことにたくさんチャレンジしてきました。

たくさん歩いて、足が痛くなってきたので、だんだん歩けなくなってきました。なので、元気に歩くことのできる魔法の言葉、歩調コールでみんなと歩くことにしました。大きな声を出して喉が痛くなったけど、僕らの声が皆を応援して、今は離れている家族に届いて欲しいと思った。

もうすぐ家族に会えると思うとどんだん力がみなぎってきました。そして涙も出てきました。

もうね。雨なんて気にならなくなってきましたよ。

やっと、ゴールの公民館に到着。

家族や多くの人が僕らの到着を待っていてくれて、みんなから「よくがんばった！」と声をかけてもらい、ひじタツチをしてゴールしました。

ゴールテープの向こうにいる家族はみんなニコニコしていたけど、僕は涙がとまりませんでした。ゴールできて嬉しかったけど、仲間たちやスタッフとお別れになっちゃうんだな。また会えたらいいな。

自分ではできない。と思っていたけど、やればできることがわかりました。

この夏、僕らは旅に出たよ。

旅に出て、たくさんのお友だちの応援がとうに気がついたよ。

応援してくれた家族、学生スタッフのみんな、班のみんなありがとう。



最終日恒例のご来光を拝むことはできませんでしたが、幻想的な故郷の朝に、子どもたちの歓声が上がりました。

あきる野市について

あきる野市は、人口約8万人、都心から40～50キロメートル圏に位置し、秋川と平井川の2つの川を軸として、秋川丘陵と草花丘陵に囲まれる平坦部と、奥多摩の山々に連なる山間部から形成されています。

市名にある「あきる」は、阿伎留・秋留とあるように地域一帯の呼び名であり、阿伎留神社など歴史があることや、緑豊かな自然や中心部である秋留台地をイメージできることで、多摩川を境に東の平野の「武蔵野」に対し、西の平野をあきる野とし、平成7年の秋川市と五日市町の合併時に、新市の名称を「あきる野市」としました。

あきチャレの活動にあるもの

あきる野サマーチャレンジ（あきチャレ）は、生きる力の醸成を目的に2005年から2011年まで実施された【あきる野100km徒歩の旅】、自然体験から郷土愛を育むことを目的に2012年から2016年まで実施された【あきる野自然塾】から続く、今年で17年目の子どもたちを対象とした地域体験型の事業です。

今年度のあきチャレは、8月11日から14日の3泊4日の行程、参加者10名（小学4～6年）、学生スタッフ15名（中学生4名、高校生3名、専門学校生1名、大学生7名）、社会人スタッフ12名で実施しました。

あきチャレのコンセプトは、私が社会教育委員に出向した3期6年にかけて調査研究し、あきる野市教育大綱【ふるさとを誇りに思う人づくりと、あきる野の香りがする「あきる野っ子」が育つ教育】の具現化に向けて提言した3つのきょういく、**共育**（大人も子どもも共に育つ）・**協育**（様々な人が協力して子どもたちを育てる）・**郷育**（地域にある自然や文化で子どもたちを育てる）となっています。

企画立案から作成、提言まで携わった提言書（令和1年からも継続中）	
研究テーマ・年度	主な内容
大人・子どもの全てが輝くまちづくり （平成26年～平成28年）	次代を担う子どもたちの健全育成、特に生きる力を育成するために家庭・学校・地域の連携・協力の強化を提言。子どもの生活・環境・体験に関する市民アンケートの実施。
人と人がふれあい、つながるまちにするために （平成28年～平成30年）	地域と家庭の関係性や人と人が繋がらう我がまちの現状と地域が子どもたちを育てる一役となることを提言。子どもを中心に活動をしている地域団体へのヒアリングの実施。3つのきょういく「共育」「協育」「郷育」への働きかけ。
だれもが主役のまちづくり （平成30年～令和1年）	人が繋がらう地域力が、教育大綱にある「あきる野の香りのするあきる野っ子」を育てることを提言。地域であきる野っ子を育てる「郷育」の具体的な活動への働きかけ。

あきチャレの活動は、山登りや川下り、沢登りといった自然体験、深夜2時に起きて深夜からご来光まで地域を眺めることや体育館での宿泊、自分たちの生まれ育った地域を4日間で約80km歩くといった非日常的体験、小学生から大人と一緒に生活をする世代を超えた協同体験が主となっています。こういった直接体験を通して、子どもたちは【自分にはやればできる力があること・新しいチャレンジすること・周りと共に生きていくこと・自分にも周りを元氣や勇気を与える力があること・支えてくれる家族や仲間たち、有形無形様々なものへの感謝】などを気づいたりします。

当日の子どもたちの引率や安全、広報などを担当し、子どもたちの旅を全面的にサポートするのが、中学生から大学生（院生）までで構成される学生スタッフです。子どもたち一人ひとりに寄り添い、どんなときも励まし続ける姿勢は、子どもたちへの大きな効果となっています。また、学生スタッフは事業前後の準備はもちろんのこと、保護者への対応なども担当します。それらは大人が指示を出すのではなく、学生スタッフ一人ひとりが主体的に考え、スタッフ間で話し合い、全員で行動します。学生スタッフは、この過程において個々の夢や自身の成長に合わせたチャレンジをすることとなります。

あきチャレを通して、子どもたちだけでなく学生スタッフにも生きていく力を提供するのが私たちの使命となります。

中学生スタッフ (過去、参加者)	過去の参加で得た経験と感謝の気持ちを、今度は恩贈りの一つの形としての参加。
高校生スタッフ	先輩である大学生や、大人の話聞くことで解消し、将来に対する自分の考えが具体化します。校外とのつながり、他者とのつながりから自分自身の強みを見つけることにつながります。
大学生スタッフ	大人から直近の問題である就職について聞くことができ不安が少し軽くなる。また、学業と対公（おおよげ）の活動との両立をすることで、自身の活動が周囲の笑顔や積極的な変化に貢献できることを実感して、社会に出る（貢献できる）ことへの経験をつむ。

子どもたちと学生スタッフは互いに励ましあいながら、試練と困難の連続である4日間の旅を乗り越えていきます。

最終日ともなると、3日間で酷使した足は痛み、一人ひとりが心身ともに辛いにもかかわらず遅れそうな仲間を応援し、背中を押し上げ、手を繋ぎ、「歩ける！できる！がんばろう！一緒に歩こう！家族が待っている！」と大きな声を掛け励ましあいながら共に歩きます。「絶対にゴールする」と重ねた一步一步が、できないといわれたゴールへの近道であり、自分も【できた】経験と感謝の言葉を述べ、涙を流してのゴールは、感動の一言に尽きます。



参加者代表と班付サブリーダーよりゴールの言葉を受け、待ちに待ったゴールとなります。雨が続く行程でしたが、諦めずに80kmをみんなで歩ききりました。



ゴール後は完歩賞授与の解団式です。子どもたち・スタッフはお揃いのティーシャツで記念撮影。
(写真使用に関する承諾は得ております。)

コロナ禍で感染症防止対策を講じながら実施したここ2年のあきチャレですが、人と人が繋がる機会や体験することが、人の成長には必要であることを改めて私に教えてくれました。これからも基本的なコンセプト、事業を通してのメッセージは踏襲しつつ、あきる野の香りのするあきる野っ子の育成だけでなく、これからの社会の創り手を育成することも意識し、SDGsなどの考え方やそれらとあきチャレとの関連性を当てはめて活動を展開していく予定です。

また、青少年だけでなく全ての人々が互いにに関わり合いながら夢や成長を応援していくことのできる機会を創造し、提供できる団体になっていくことを視野に入れ、**EGAO—Everyone (みんな) Encourage (勇気づける) Growth (成長) Ambition (大志) Opportunity (機会)** を、自分の軸として今後の活動を展開していく予定です。

個人としては、生涯成長を忘れることなく、子どもたちに関すること、様々な立場からのメッセージをみなさんからどんどん学び、吸収し、それらを地域の活動を通してお伝えしていきます。今後は対面などご一緒することもあるかと思いますが、引き続きご指導ご鞭撻のほどどうぞよろしくお願いたします。(了)

2年目を迎えて

谷野敏子（元堺市教育センター所長・こども支援士）

ドバイの気候

昨年の8月にドバイに来て、はや1年以上が過ぎました。

ここドバイでは、1年の3分の2の期間は気温が30度から40度と高く、湿度も高いです。砂塵もすごく飛ぶので、コロナ禍でなくても私にはマスクが必需品です。

12月でも、最高気温はまだ30度ととても冬とはいえませんが、1月には、最高気温24度、最低気温17度と私にはとても過ごしやすい季節になります。一方、アフリカやインドなどから来ている人たちは「寒い。冬が来た。」と言ってダウンコートを着ている人もいます。感じ方はさまざまです。コロナ禍で1年延期になったEXPO2020も10月1日から開催され、涼しくなるにしたがって訪れる人も増えています。木曜、金曜は午前2時まで、他の日も午前0時まで開催しています。

年間を通して、日中に外で過ごせる時間がとても短いので、夜に外出する機会が自然と増えるのでしょうか。夜はいたるところに電飾が多く設置され、とても明るくて、夜中までたくさんの人が散歩したり談笑したり運動したり食事したりしています。子どもたちも一緒にいるのをよく見かけます。人々の一日の過ごし方が日本とは違うようです。



夜も多くの子どもたちを見かける EXPO2020

学校支援



ドバイ日本人学校

ドバイ日本人学校には、小学校1年生から中学校3年生までの約120人が通っています。学校で昨年度からはじまった「シルクプロジェクト」では、UAEと日本の両方の子どもたちが蚕を育てて繭からスカーフをつくり、UAEオリンピック代表団に贈呈しました。実際に選手たちが東京オリンピック開会式で着用しました。

このプロジェクトには、学校の子どもたちだけでなく、私たち学校関係者も協力し、日本から届いたたくさんの蚕の卵と人工の餌を一部預かって何度か自宅で育てました。蚕は日本古来の品種で『小石丸』という皇室でも育てられている品種で、一般的な蚕よりも小さく少し弱い感じがし

ました。まさかドバイで日本の蚕を初めて育てることになるとは思いませんでしたが、育ててみるととてもかわいく、湿度や温度を気にしながら、どうすればうまく育つか色々調べて、たくさんの繭ができると嬉しく思いました。私は、ホテルアパートメントに住んでいるのですが、無機質なホテルの部屋の中で、こういった飼育体験をすることで、心が温まったり充実感を感じたりしました。

暑さが厳しいので、子どもたちは、家ではもちろんのこと、日本の学校で行っている栽培活動（あさがお、ミニトマト、ヘチマなど）や飼育体験（ザリガニ、モンシロチョウ、うさぎなど）もここドバイではほとんどできません。学校では、先生方がいろいろ工夫をしていますが高温のためなかなか難しいようです。実際に植物や虫などを育てる



開会式でスカーフをしている UAE 選手団

体験がなかなかできにくい環境に来てみて、はじめてその大切さに気付きました。子どもたちにとって、栽培活動や飼育体験などのなかで育まれるものが確かにあるように思います。

まだ学校には立ち入ることができないので、私は他の教員配偶者と協力して子どもたちに日本の季節を少しでも感じてもらおうと掲示物の作成をしています。デザインや材料を話し合ってから、数人で作成して、毎月、たとえば5月にこいのぼり、7月に七夕飾りというように掲示物を作って学校の玄関に飾ってもらっています。今は、ドバイでも日本のテレビ番組を見ることができず、友だちともオンラインやSNSで話せて、昔と比べると孤独感を感じることは少ないと思います。ただ、どんなにそういったもので繋がっていても、やはり直接顔を見て人と話すことができないと、少しずつ疲れていき、意欲が落ちていくのを感じました。このように直接数人でも集まって作業しながら話す機会があることは私にとって大変ありがたいことです。



仲間と学校支援の飾りを作成中

気になっていること

ドバイで暮らして1年が過ぎ、このコロナ禍での影響ももちろんあるかとは思いますが、子どもたちを取り巻く環境として気になっていることをお伝えしたいと思います。

就学前の子どもたちは、ナーサリーと呼ばれる保育所のようなところかプレスクールと呼ばれる幼稚園のようなところか自宅でナニーさんと呼ばれるベビーシッターと家庭教師の役割をする人と過ごしています。もちろんナニーさんがいて、ナーサリーやプレスクールに通っている幼児もいます。その中でもナニーさんを雇うのが一番安く、一方ナーサリーやプレスクールはたくさんありますが、とても高額です。どこも英語オンリーの対応です。日本人幼稚園も1園ありますが、5歳児1クラスと3・4歳児合同1クラスの2クラスで1クラスもコロナ対応のため10人までです。せっかく海外に来ているのだから英語に触れさせたいと考える保護者も多く、英語の環境が豊かな方を選ぶ傾向があるようです。

そのような環境で、就学前の子どもたちは、とても暑くて外に出にくい生活、日中はナニーさんや母親と二人だけの生活、そして、休みの日も家族だけでの生活を過ごしていることが多いです。保護者は時間的に余裕があるので、常に子どもと一緒にいて、何か困ったことがあってもすぐに解決してくれますし、経済的には豊かで要求も比較的通りやすいので、子どもたちが困ったり、つまづいたりすることがあまりありません。勉強熱心な保護者が多く、読み書き計算は早くから身につけています。暑くて室内遊びが多いので、タブレットを使ってネットサーフィンをしたりゲームをしたりしている子どもも割合多く、反対に自然体験は圧倒的に少ないです。

ドバイでは、これまで日本人会で赤ちゃん会を作って小さな子どもたちが集まれる機会を作ったり、学校外でも保護者同士で声をかけて小グループで集まれる機会を作ったりとさまざまに工夫して、子どもたちが年齢差を越えて一緒に過ごせる時間を意図的に作っていましたが、残念なことにコロナ禍でそのほとんどがなくなってしまいました。家族以外の人との関わり合いが極端に減っていると感じます。

保護者の一定の見守りのなかで幼児期から同年齢や異年齢の子どもたちが一緒に遊び、さまざまな体験をすることは、子どもたちの非認知能力（社会性やレジリエンスなど）を育てるのにとっても大切なことだと思っていますが、それがなかなか難しい状況が続いています。元々子どもだけの世界が小さい場所で、コロナ禍にあってそれがさらに小さくなったように感じています。自分で解決する力やつまづいても立ち上がる力が十分育っていないことが、今後子どもの発達に少なからず影響を及ぼすのではないかと危惧しています。

子どもたちは小学校に入学すると、急に20人前後の集団での生活となります。そこには、いつもすぐに問題解決をしてくれる保護者はいません。きっと今まで以上に戸惑うことが多いのではない

かと思えます。小1プロブレムはこれまでもありましたが、その段差がもっと大きくなっていることも考えられます。学校では、そういった体験が少ないことを理解して、できるだけ子どもたちに話し合う機会やさまざまな体験の機会をつくりながら学びを進めていくことが大切ではないかと思えてなりません。

コロナ禍の中にあって、今までとは同じようにいなくなった子どもたちの世界をよく見ながら、家族の枠の中から離れて、子どもと子どもを繋ぐ場所、子どもの社会性やレジリエンスを育てる場所としての学校の役割を今一度見直していくことが大切ではないかと感じています。(了)

信州 上田だより 2

一茶「けし堤て群集の中を通りけり」を読む

市原 潤（保護司・元公立高校校長）

この句には、「けし堤て喧嘩の中を通りけり」の異稿がある。

両者を比較して、金子兜太¹は、「群集」というような意味ありげなことばは、一茶の好みではない。「喧嘩」という、…ぶっきらぼうな庶民的語感、「なによりも、…カ行音のひびき合いがよいのだ」と書いている。

また、阿部完市²も、「(喧嘩の句は)群集の中をとおりけり、を越えて、澄んでいる。群集という抽象のなかに、そのものの作す一点の行動の具体を見せて、抽象というものを、より一点にしぼってみせ、明示し得ている」として、「喧嘩」の句のほうを評価している。

句中の語の一部を変えることは一茶自身には、珍しいことではなかったが、この句が世に出るについては、次のような経緯がある。

「けし堤てけん嘩の中を通りけり」は、一茶自筆の句日記である「句帖」のうち文政8年4月の「文政句帖³」に収められている。一方で「群集」の句は、一茶自身が遺稿⁴として準備していた手稿を、一茶の没後、門弟たちが編集出版した『一茶発句集(文政版)⁵』(文政12年刊)に収録されている。さらに没後22年の嘉永元年、『文政版』に301句が追加されて、『(一茶発句集)嘉永版』⁶が出版されているが、そこでも「喧嘩」ではなく「群集」が採用されている⁷。一茶は自身の句として、「けし堤て群集のなかを通りけり」を残そうとしたと言えるのではないだろうか。『嘉永版』の編集にあたった門弟たちも一茶の遺志を尊重したにちがいない。

「群集」

一茶の句⁸で、「群集」の語が使われるのは、他には「ほこの児群集に酔もせざりけり⁹」だけである。「群衆」の語は江戸時代には存在しなかった。

1 金子兜太(1919-2018) 埼玉県、現代の俳人、日本芸術院会員、現代俳句協会名誉会長、文化勲章を受章。句集多数。代表的な句に「曼珠沙華どれも腹出し秩父の子」「湾曲し火傷し爆心地のマラソン」「おおかみに螢が一つ付いてきた」など。社会性の強い句を詠んだ。2018年、窪島誠一郎、マブソン・青眼とともに、「俳句弾圧不忘の碑」の建設を呼びかけ、その碑文を揮毫した。引用は『小林一茶』182頁。岩波現代文庫 2014年(初刊は小沢書店 1987年)

2 阿部完市(1928-2009) 東京都、精神科医、現代の俳人、代表的な句に「栃木にいろいろ雨のたましいもいたり」「にもつは絵馬風の品川過ぎてゆく」など(いずれも句集『にもつは絵馬』)。引用は、「けし堤ての句—一茶の自然—」(『一茶の総合研究』信濃毎日新聞社、昭和62年、所収)。

3 全集第4巻(『一茶全集』は全9巻 信濃毎日新聞社 1976-1980年)

4 全集別巻214頁の『一茶発句集(文政版)』刊行の経緯についての説明による

5 全集別巻所収

6 同上(244頁に『嘉永版』刊行の経緯について「補遺」として全集編集者の説明がある。

7 全集別巻257頁

8 一茶は生涯に二万余の句をつくったが、現在、website「一茶の俳句データベース」で、その全句を検索できる。

9 全集6巻『句稿消息』444頁

江戸時代の歳時記には、寺院神社の祭礼などに「群集す¹⁰」という表現がみえるが、「人出が多い」という、当該行事についての情報提供にすぎない。一茶の句では「群れ」は「群集」の語のほかには螢と蠅、雁についてのみ使われている。「群ら螢どれがせ田組粟づぐみ」「群蠅の逃た迹打皺手哉」「一群は今来た顔や小田の雁」などである。「群」は多数、「群集」も単に多数の人々の表現であり、それ以上の心情的なニュアンスはない¹¹。「男衆」、「女衆」の語はあったが、「群衆」は存在しなかった。

したがって、この句の意味は「けし堤て」と「通りけり」にある、とってよいだろう。俳句ではふつうは「私」という主語は省略される。群集の中には喧嘩をする人もいたかもしれない。だが、喧嘩は作者の主たる関心事ではなかったため、のちに喧嘩は群集に改められたのだろう。

「けり」は過去の伝聞、または詠嘆の助動詞だから、句の明示的な表現は「芥子を堤て、群集の中を通ったことだ(なあ)」である。ここには、二つの主体が存在する。芥子を堤て歩く人と、それを過去の出来事として表現する人(助動詞けりの主体)である。

黄色瑞華¹²は句の解を次のように記している。

「だらしとしないだれた芥子の花を一本手にぶらさげた男が、人だかりの中に行く。芥子の花を手にもぶらさげた男の内心と、それを外から見る者の内心の対比に俳諧性を見たい。」

黄色は自身の評釈の後に、諸家の評釈を紹介している。摘記しよう。いずれも大正から昭和戦前戦後の註である。

川島『新釈』:「…濃艶でデリケートな芥子の花…をさげて群集の中を通り抜けて行くはらはらとした気持ち。同時に、美しい花を持って行くことに拠る仄かな晴がましきまでも感ぜさせられる。…」

勝峯『名句評釈』:「あの弱々しさうな、さはれば落ちなんとするやうなあえかの花を、群集の中…喧嘩では余りあくどい感じがする…を後生大事とさげて通るのは、あぶなっかしさの美といふやうなものを強く感じさせる。…」

暉峻『鑑賞』:「…風にも得たへぬ脆く美しい芥子の花束を携げて、浅草の仲見世通りのやうな、夜の新宿のやうな群集の中を抜けてゆく、はらはらとする気持ち、美のスリル…」

金子『一茶句集』:「…「群集」では韻律が鈍る。「けし」「けんか」の乾いたひびき合いに人間たちの顔があり、その人たちに向けた一茶の諧謔(フモール)がある。…」

「男」はどんな目的があって「芥子を堤て」いるのだろうか。どんな芥子を堤て、どこへ、何のために、歩いていくのだろうか。句は瞬間のイメージを描くが、語の理解や受容には共通のベースがある。同時にそれは読者に任されているようにも思えるが、作者の本来のイメージも意図もあり、感情や思考の筋道もある。句の受容も理解もそのうえでなされるべきものであろう。

「芥子の花」

江戸時代、文化文政年間には従来の一重の芥子に加えて八重の芥子が栽培され市中にも出回るようになった。先にみてきた諸家の芥子のイメージは、わが国伝統の「ひなげし」である

一茶に芥子の句は三十数句ある。単に芥子と記される句も多いが、一重の芥子(ひなげし)は、私たちがよく知る今日一般的なもので、花卉もうすくもろい、咲いても雨に当たればすぐにしおれてしまう、摘み取った花は一日か二日で萎れてしまう。芥子は儂さや脆さ、危さの比喩や象徴だった。

芥子の花々と見る間にあらし哉(寛政句帖 寛政6)

咲く日より雨に逢けりけしの花(享和句帖 享和3)

生きて居るばかりぞ我とけしの花(七番日記 文化7)

¹⁰『東都歳時記 3巻』(東洋文庫 平凡社)に例えば「5月28日、両国橋の夕涼、茶屋・花火…、毎夜貴賤群集す」などの記述多数。

¹¹ 諸橋『大漢和辞典』では「群」の語義は①むらがる(和を以てあつまり居る)、②むれ。会衆(以下略)などあり、「群集」の語義は、むらがり集まる。用例として[詩]、魯頌、潔白之士、群集於君之朝 をあげている。

¹² 黄色瑞華「嘉永版『俳諧一茶発句集』全注解(4)」(城西人文研究第20巻第2号、1993年1月)

一茶は、文化9年4月3日 現在の千葉県富津市の門人の一人であった花嬌¹³三回忌法要に出席した翌日、その追善句会で次の句を詠んでいる。

目覚ましのぼたん芍薬でありしよな
何をいふはりあいもなし芥子の花

生前の花嬌の容姿やひととなり、またその句も、さながら牡丹や芍薬の花のように、芥子とは対極の、豪華に咲き誇るあでやかで艶なものであった。しかし、彼女の死には「何を言う張り合いもない」ほどに、一茶の喪失感は大きく、深い悲哀に沈んだ。華やかに咲いて散ってしまう芥子の花に一茶は花嬌との出会いと別れとを重ねている。花嬌とその句は「ぼたん芍薬」だったが、その死は一茶には芥子の花のような儚さを感じさせたにちがいない。

江戸時代の園芸にかける市井の情熱は盛んなものがあつた。江戸市中には多数の植木屋や花屋が存在し、新種の開発普及、外国からの新種の輸入も盛んだつた。文政期には一茶の句にも紫や赤、また八重咲きの華々しくもあでやかな芥子の花が詠まれるようになった。

八重一重栄花尽くせり芥子の花（『七番日記』文化15（文政元）1818）
一重でもすまましものを芥子の花（『文政句帖』文政7年）
何ごとの八重九重ぞ芥子の花（『文政句帖』文政8年）
紫の上に八重なり芥子の花（同）
善尽くし美を尽くしても芥子の花（『文政版』文政12年）
けし提げて喧嘩のなかを通りけり（『文政句帖』文政8年）
けし提げて群集のなかを通りけり（『文政版』文政12年、『嘉永版』嘉永元年）

文政8年の「けし提げて」の句を一茶は遺稿において「喧嘩」ではなく「群集」と改めていたが、『文政版』も一茶自身による修正を認めたのだろう。また『嘉永版』発行者も『文政版』の改訂を認めて、「群集」としている。

一茶が、芥子を堤て歩く姿を、喧嘩ではなく群集のなかとしたのは、芥子の花の印象を鮮明にしようとかんがえたからにはほかならないだろう。喧嘩では、句が芥子と群集の二つに分裂してしまう。群集のなかで人々はその表情も姿態もまた動きもさまざまだろうが、作者にとって群集は、芥子を提げて歩く男の背景にすぎない。作者は群集には関心がないのだ。芥子を提げた男の姿を捉えたカメラをひいてくると群集が視界に入る、俯いて芥子を手に提げた男がどこかに向かって歩いている。花嬌に届けようとする芥子の花かもしれない、あるいは、芥子の花そのものが花嬌の比喩だったのかもしれない。あるいはまた、それは花嬌自身だったのかもしれない。

文化9年の三回忌には芥子はまだ一重のものしかなかった。一茶が八重の芥子を初めて句に詠んだのは文化15（文政元）年¹⁴だった。文政年間には、牡丹にも芍薬にも見紛う八重九重の芥子が現れた。文政8年の一茶の提げているのは八重の芥子に違いない。すでに当時の小石川植物園には牡丹芥子の名で栽培されていた芥子もあった時代である¹⁵。自身の句を整理して遺稿の準備をする一茶は、文政8年の芥子の花を、花嬌の思い出とともに八重九重の芥子として、喧嘩ではなく群集のなかに置いたのではないだろうか。群集のなかに八重の芥子を堤てひときわあでやかな姿をみせているのは、花嬌の幻であつたのかもしれない。

¹³ 花嬌は、下総富津の名主織本嘉右衛門の未亡人、対潮庵と号した。文化7年9月3日没。子の子盛も門人で花嬌没後も一茶と親交を結んだ。現代の作家にも一茶を主人公とする物語に花嬌が登場する。藤沢周平『一茶』（1978）、井上ひさし『小林一茶』（1980）、矢代静一『小林一茶』（1991）、田辺聖子『ひねくれ一茶』（1992）

¹⁴ 一茶『七番日記』文化15（文政元）年に、「八重一重栄花尽くせりけしの花」がある。

¹⁵ 『小石川植物園前史』（『日本植物研究の歴史--小石川植物園300年の歩み』1996所収）に、明治4年調査資料として記載されている植物名のひとつに「芥子牡丹」がある。

自己紹介

○杉本美佐子(元大阪府柏原市立堅下小学校講師)

元小学校教諭の杉本美佐子です。大阪府柏原市の公立小学校 6 校と同貝塚市の教育支援センター(愛称レインボー教室)にて、計 38 年勤務後、退職して三重県津市に転居しました。平成 30 年から現ボランティアの活動に励んでおります。

高齢化社会を見据えて、今後は自分の生きがいと新たな友達をつくる目的で、ボランティア活動に入会しました。詳しくは申せませんが、おかげさまで新たな友達にも恵まれ、楽しい日々を送っております。91 歳の実母の介護もありますが、現役時代と違って、心と時間にゆとりが生まれたので、日常生活や社会の出来事に対して、様々な見方ができるようになった事を喜んでおります。教育の世界からは、一歩引いている今だからこそ、見えてくる事もあるようです。深谷昌志先生には、大学時代に大変お世話になりました。卒業以来、44 年ぶりにメールを送らせて戴いたことがきっかけに、日本子ども支援学会に温かくお誘い戴きまして、今日に至ります。会員の皆さんは、私より若い世代の方が多くに思いますが、ニューフェイスですので、どうぞよろしくお願い致します。

なお退職後、下手の横好きの短歌に嵌まっていて、稚拙な一首でお披露喜に……。

眠れぬ夜 ユーチューブ見て目が冴えて 雨戸開ければ有明の月

○吉田真弓 (桜花学園名古屋短期大学保育科)

桜花学園名古屋短期大学保育科准教授の吉田真弓と申します。大学教員となって 3 年目になりました。それまでは、公立保育園・幼稚園に勤務しておりました。

現場で保育者をしていた頃から、子どもにとって魅力的で楽しい活動とは何か? を常に考えながら保育を行ってきました。大学教員となった現在もそれは変わらず、学生にとって興味が持てる授業が展開できるよう、日々試行錯誤しています。ゼミ活動では、現場の保育者になる前に学生たちにできるだけ多くの体験をしてもらいたいと考え、様々な体験活動を取り入れています。今年度はさつまいもの苗植え、収穫、調理を行いました。干し柿作りや、マテバシイを使つてのドングリ団子作りなど、家ではなかなか体験できない活動も取り入れています。また、私自身手芸が大好きなため、ゼミのみんなで手袋人形を製作し、グループで人形劇の発表をしたりして楽しんでいます。

先生方と一緒に学ばせていただくことができ、大変嬉しく思います。どうぞよろしく願いいたします。

○新井美保子 (愛知教育大学幼児教育講座)

愛知県刈谷市の愛知教育大学に勤務して丁度 20 年目、それ以前は県内の短大幼児教育学科・初等教育学科に 16 年勤務しましたので、かれこれ随分長く保育者養成に関わってきました。この間、基本的に幼児教育学関連科目及び保育所実習(短大時代は幼稚園実習も)を担当してきました。現在の所属講座では、学生定員がこの数年で 18 名から 30 名に増え、教員スタッフも 4 名から 6 名になり、国立大学の幼児教育専攻としては大規模(?) になってきました。地域の保育現場で活躍できるように学生を支援して参りたいと思います。

最近の関心事は、①教職大学院の入学生がいないこと、②子ども主体の教育やその保育実践方法を学ぶ実習の在り方、等です。①については、幼児教育コースは開設 2 年目ですが、1 種免取得者限定の入学条件に加えて保育職には現職派遣制度がなく、入学に困難さがあります。学部生の 6 年一貫教育も視野に制度や内容の改善を図っていきたいと思います。

この機会に皆様から新たな視点で学ばせていただけることを楽しみにしております。どうぞよろしく願い申し上げます。

○丹羽 孝 (名古屋市立大学特任教授)

学会員の先生方に初めてご挨拶させていただきます。名古屋市立大学の丹羽でございます。この度、清水陽子先生(九州産業大学)との共同研究のご縁で、入会させていただきました。このところ韓国幼児教育研究に専従していますが、昨年来清水先生を代表とする共同研究で、「韓国国家水準幼児教育課程の改訂・実行過程に関する調査研究」に従事しています。ご存じのように韓国では日本に先立って、3歳以上の幼児を対象とする、幼保共通教育・保育課程を実現しています。そして偶然にも2019年が久しぶりの改訂年にあたり、2019改訂の幼保共通教育課程の改訂背景、改訂内容、発展課題を研究しています。ところがまたこの研究では各地方を代表する幼稚園や保育施設を現場訪問し、現場水準の受容過程の実際を調査研究する計画でしたが、コロナ渦の影響でなかなか訪問調査ができないことで困っています。そこで緊急避難的に今は基本資料の翻訳(「2019改訂ヌリ課程改訂公示文」、「2019改訂ヌリ課程解説書」、「2019改訂ヌリ課程遊び理解資料」、「2019改訂ヌリ課程遊び実行資料」等)と読み込みで対応しています。また、お知らせですが、この3月には、清水先生との共同でキムギョン Chol先生(現韓国幼児教育学会長)の『遊び指導』を公刊しました。これは2019改訂ヌリ課程が「子ども中心・遊び中心」をキーワードとしているので、韓国における遊び保育論の指導者のお一人であるキム先生の研究に注目し、韓国における遊び研究の現況を正確に理解するための作業でした。そしていましばらく、日韓幼児教育研究交流発展の支援者として研究活動を進めたいと思っています。以後よろしくご指導くださいますよう、御願い申しあげる次第でございます。

句会 むさしの

○百舌鳥鳴くや閉鎖ま近き鉄工所

安田 勝彦

少年の掛け声続く今朝の冬

銀巴里の消えし銀座や冬帽子

俳句の楽しさは、想像する世界が沢山あることだと思います。その延長に造る楽しさがあります。今年もあと1か月。コロナもおさまりにかけているかのようです。

○降りたてば草の穂波や無人駅

市原 潤

まなうらに紅葉もゆるや定家の忌

せいたかの荒々しくも花野かな

残菊に陽だまりありて二人かな

ヴァイアラスと言ひし医師あり冬の道

たいしたことではないのですが、会議で一緒になった医師を車で送る途中の峠道、ウィルスでヴァイアラスと言ったのが印象に残ったのでした。virusは、ドイツ語ならヴィールス、英語だとヴァイアラス、日本の医学はドイツ流だと思い込んでいたので(鴉外の時代でもないのに)、そこだけなぜか違和感をもったというだけのことです。昨今の流行語になったウィルスで思い出しました。

友からも写真続々部分食

復円す人が去りても秋の月

11月19日は、部分月食でした。事前に、それを子どもに知らせる教材プリントを作り、なかまとシェアしていました。

当日、雲の上に出た時には、もう半分以上欠けていました。「欠けてるよ」とLINEで送ると、なかまたちから続々と写真が送られてきました。最初は奈良市内から、続いて五條、田原本、生駒そして西ノ宮。みんな同じ空を見上げているのだなあ、いい心地で私もシャッターを切りました。

月に映っているのは地球の影。地球の下半分くらいが映っています。とすると、あの地表の影は、ちょうど日本の真下方向、つまりブラジル辺りの影ということになるのでしょうか。

ほぼ皆既の赤黒い月は、やがて光を取りもどし、時間をかけてゆっくりと復円していきました。

編集後記

最近の日本での大きな不思議は、コロナ感染者の急激な減少。ワクチンの効果だろうと専門家は言いますし、日本は衛生思想が高い国だという人もいます。でも、いまだに何万人もの感染者を出している欧米の町を歩きかう人々の写真を見ると、依然としてノーマスクの人も。副反応が怖いという単純なものから、国の指示に従うことは断固として嫌だという声も。一億総マスク状態の日本人は同調圧力に弱いのか、国の指示に対して抵抗感が少な過ぎる国民なのか。小さいファシズムの土壌と言ったらオーバーかもしれませんが、逆に心配のタネに思えることもあります。編集と関係ないことを書いてすみません。

(深谷和子：kazukofukaya@nifty.com)

〈編集委員〉

深谷和子（長）・湯浅俊夫・上島博・清文枝・土田雄一・大高志芳・吉野真弓・細江久美子

〈「風の便り」 2021年12月号目次〉

[今月の軽井沢](#)

細江久美子

[今月の詩](#) 「歳末」 清岡卓行

ゆあさとしお

[実践報告](#) あきる野の香りのするくあきる野っ子>を育てる「あきチャレ」

遠藤隆一

[ドバイ通信 2](#) 2年目を迎えて

谷野敏子

[信州上田だより 2](#) 一茶「けし堤て群集の中を通りけり」を読む

市原 潤

[会員談話室](#)

[自己紹介](#)

杉本美佐子 吉田真弓 新井美保子 丹羽 孝

[句会 むさしの](#)

安田勝彦、市原 潤、上島博

[編集後記](#) (深谷和子)